

天唱凰姫

小説 ヤミヨ

挿絵 はっとりまさき

カリン

淫辱に舞い墮ちる翼

立ち読み版



一章	神鳥降臨	006
二章	暗躍する鴉	020
三章	翼をもがれた神鳥	058
四章	鵜	100
五章	金糸雀	135
六章	産卵淫獄	168
最終章	淫獄の果てに	206

登場人物紹介

Characters



ま と ぼ かりん
真鳥羽火凜

普段は普通の学生だが、天唱凰姫カリンに変身して凶鳥と戦う少女。正義感が強く、気丈な性格。正義のヒロインとしての自分の力を少々過信気味で突っ走ってしまう事がある。



さ え ぐ さ さ き
三枝咲

学園で生徒会長を務める、火凜の親友の少女。火凜が戦っていることを知っていて、いつも無茶な戦いをしている火凜を常に心配している。



か ら す ま め い
烏丸冥

火凜たちのクラスに転入してきた姉妹の姉。その正体は高い知性と能力を持った鴉の凶鳥。丁寧な言葉遣いだが、冷酷かつ残酷な性格の持ち主。



か ら す ま あ ん
烏丸暗

烏丸姉妹の妹。とても狡賢く、人を小馬鹿にした態度をとる。姉と同様その正体は上位に位置する凶鳥で、ある狙いにより火凜に近づく。

「あららァ、そんな態度でいいのかなァ？ まあ、私は楽しめるから良いんだけどねエ」

健気な態度をとる獲物に、アンは舌なめずりをし、可愛らしいブラジャーに包まれたEカップの肉鞠をじっくりと鑑賞すると、ゆっくりと最後の砦である下着に手をかける。

ブチッ！

強引に下着を剥ぎ取ると、下着の締め付けから解放された巨乳が、プルンッ！ と震える。

アンは迷わずその豊満な乳房に手を伸ばした。

「ンあっ！」

ムギユウッ！

妹鴉の指が柔らかな乳肌食い込んでいく。力強く胸を揉まれ、固く閉じたはずの口から思わず声が漏れてしまう。

妹鴉が沈んだ指から力を抜けば、生意気な肉鞠は指を押し返し、元の形に戻ろうとする。そんな乳肌の感触を楽しみながら、アンは満足げにニタニタと笑った。

「あははっ、おつきくってえっちなおっぱい！ もしかしてエ、咲ちゃんが生徒会長になれたのってこのおっぱいで皆を誘惑したからじゃないのォ？」

「あっ、そんな……わけ……、くううッ！」

掴まれた乳房に走る痛み。

妹鴉に乱暴に胸を蹂躪され、言葉で詰なられれば、あまりの恥ずかしさに顔から火を噴いてしまうのではないかと言うほど、顔が熱くなっていく。

「どう、気持ちいい？」

「あつ、くうう……ッ、こんなの気持ち悪い……だけです……」

気持ちよさなど感じるわけもない。

感じるのは恥ずかしい部分を責め立てられる嫌悪感と、胸に指が沈むたびに感じる痛み混じりの搔痒感だけだ。

「本当にイ〜？」

だが顔を顰める咲に、顔を近づけながらアンは豊満な乳房を嬲り続けた。

指に力を込め、何度も何度も指を柔らかな乳肌に沈めては生徒会長のゴム鞠のような胸の弾力や艶を確かめる。

——い、いや……ッ、おっぱい……壊れちゃう……。

咲だつて同性の友人同士でふざけあつて胸を揉まれたことはある。しかし、その時とアンの愛撫はまったく違う。

相手のことなどまったく配慮しない激しい乳責めに、本人の意思を無視して恥ずかしい突起が熱くなっていく。

「くううう……んっ、んんうう……ッ」

溢れそうになる涙を堪えながら、左右十本の指に揉みくちやにされる胸の刺激に耐える生徒会長。

するとそんな抵抗を見せる睨を裏切るように、次第に身体に変化が訪れる。

——なにこれ……、身体が熱い……。

アンの指が下から上へと乳房を揉み解し、柔肉に深々と沈めた指で乳芯を刺激すれば、こそばゆい焦燥感に、二つの肉球に熱が籠もっていく。

一度官能の火が灯されてしまえば、身を焦がす熱はなかなか引いてはくれない。

ゆっくりと身体全体へと浸透し、次第に体温が上昇していく。僅かに頬が赤らみ、ドキドキと胸の鼓動が早くなれば、火照った肌にもふつつつと細かい汗が浮かぶ。

「んあっ、あ……くうんん……」

口から漏れた声に混ざるのは、先ほどとは違い、苦悶の色だけでない。だが、それを認めることなど生真面目な生徒会長にはできない。だが——、

「あれあれエー、乳首も勃たつてきたよォー。こんなに固くしちやっついていやらしいイ〜」

「なっ、う、うそ……ッ、はんっ、んんうう〜ッ！」

恥ずかしい身体の変化を、妹鴉が見逃すはずなどないのだ。睨の羞恥心を煽るように、わざと声を大きくして、彼女の身体の変化を指摘する。

乱暴に弄られた両乳房の先端は、妹鴉の言葉通り固く勃ち上がっていた。本人の意思を無視した生理現象。だが、性経験に疎い真面目な生徒会長は、自分の身体に起こった症状に戸惑いを隠せない。

「嘘じゃないよォ、ほくら、こうされると凄く気持ちいいでしょォ」

「はんんっ、くう……うん……ッ！」

尖り勃つポッチをアンが指の腹でグリグリと捏ねると、今まで経験したことのない激感が胸の先端から身体中を乱暴に駆け巡る。

甘い快感に、咲は喉を大きく仰け反らせて、身悶えた。

「あはは、咲ちゃん感じすぎィ、こんないやらしいおっぱいなんて今まで見たことないよォ、ほらほらァ」

「はうんっ！ んんっ……、んあつ、ああ……」

アンは咲の反応に満足そうに頷くと、両胸の勃起乳首を指で摘む。敏感な弱点がビクリと怯えたように震えたが、もう遅い。

指に挟まれ、逃げられなくなった敏感な果実を、妹鴉が指の腹でクリクリと擦り上げた。

「それ……だめえ……、やめ、てえ……」

固くなった乳首を擦られるたびに、ピリピリと身体全体に甘い痺れが広がっていく。

頭の中で白い火花が散って、触手に拘束された手や指。爪先立ちの足がビクビクと震え

た。

敏感な突起から発せられる乳悦に、つい甘い声が漏れ、栗色の瞳が潤んでしまう。

「そんなエッチな声だしちゃって、どうしちやったのかなア〜？」

「はうんっ……うっ、うううんっ！」

妹鴉はぶつくり膨れた咲の乳首をただ擦るだけではなかった。

痛いほど激しく擦り、強烈な乳悦で彼女を苦しめたとさえ思えば、今度はゆつくりと撫でるように擦って、彼女を悩ませる。

緩急をつけた乳責めに、咲は恥ずかしい喘ぎ声を抑えることができない。

「ほらほらア〜、火凛ちゃんのために私たちには屈しないみたいなこと言ってたけど、おっぱい弄られて喘いじゃっていいのオ〜？」

「——ッ！」

アンの言葉に、ハッと目を見開くと、再び咲はギュッと唇を噛み締めた。

妹鴉の言う通りだ。いつも自分たちのために戦ってくれている親友に、無理なんてさせたくない。自分が彼女たちに屈してしまえば、次はきつと火凛の番だ。そんなことは絶対にさせない。

一度は強烈な乳悦に目的を失いかけた咲であったが、脳裏に浮かんだ親友の姿に力をわけてもらい、彼女たちの愛撫を耐えようと試みる。

しかし、現実には甘くはなかった。

「はんっ、ふうんっ、はあ……あ……あ……ッ！」

妹鴉が、勃起した乳首を様々な方向に引っ張り、アクセントを加えながら刺激すれば、彼女の意思は簡単に吹き飛び、声が抑えられず漏れてしまう。

「やっば乳首気持ちいいんだア。じゃあ、こんなことされたらどうなっちゃうのかなア
〜？ 楽しみイ〜」

生真面目な生徒会長の弱点を散々蹴った妹鴉は、ニタニタと笑うと、指で苛めていた乳首を解放する。

「あっ、え……？」

あんなに自分のことを苦しめていた弱点を解放した妹鴉に、やっさと諦めてくれたのかと期待してしまう咲。

しかし、彼女を待っていたのは、そんな期待を一気に絶望の淵へ追いやる、残酷な現実であった――。

指責めから解放され、未だピクピクと震え続ける勃起乳首に顔を近づけるアン。そして

「やっ、い、いやっ……」

咲に見せつけるように、わざとらしく彼女の目の前で、あーんと口を開く。

その行為の意味を知ってしまった咲はイヤイヤと首を横に振った。しかし、悪戯好きな妹鴉が咲の言葉を聞き入れることなどない。

「はうつ、んんウウウ……ッ！」

豊満な胸丘先端の赤い果実をパクリと口に咥え、ブヨブヨとした柔らかな舌で、怯えたように震える勃起乳首をペロリと舐め上げた。

「はうんんんウウウ——ッ！」

一舐めされただけで、まるで雷にでも撃たれたかのような衝撃が彼女の身体を突き抜ける。

ビクビクと手足を震わせ、胸の先端で弾けた快感に、ギユツと目を瞑って感じ入る生徒会長。だが、彼女の感じた激感は終わりではない。むしろこれから始まる責めの最初の手だ。

そして、もちろん妹鴉に相手に情けをかける気などさらさらない。

たつぷりと舌に唾液を絡ませ、まるで飴玉でも舐めるように、ざらついた舌の表面で勃起乳首を舐め上げていく。

「はうう……だめ、乳首……イイ……ッ！」

「んふっ、咲ちゃんのエロいおっぱい……んちゅっ、ちゅっ、おいしっ……」
ジュルッ、ジュルルルッ！

固く尖った乳首をわざと音を立てて吸い、敏感になったところをコロコロと舌で遊ぶ。触覚だけでなく、聴覚でも咲の身を弄ぶアンの責め。

胸の先端で弾ける刺激が、聞こえる卑猥な水音が、彼女の羞恥心を駆り立て、彼女の意識を胸へと集中させる。

そうなつてしまえば、余計に胸への愛撫に感じてしまうことなど、生真面目な生徒会長が知る由もない。

まだ彼女が何もわからないのをいいことに、妹鴉はどんどん責めをエスカレートしていく。

小さな口で舐めしゃぶられる片方の乳房に、咲の意識が集中した頃を見計らい、アンの指が空いたもう一つの肉鞠へと伸びる。

「あんっ、ああ……だめえ……引っ搔かないで……え……ッ！」

放置され、寂しそうに身を震わせる片方の突起に、爪を引っかけ、カリカリと引っ搔かいて可愛がつてやれば、生真面目な生徒会長は背筋をゾクゾクと震わせ、悲鳴に似た嬌声を漏らし始めた。

両胸からくる異なる刺激に、生真面目な生徒会長は只々翻弄される。

Eカップの巨乳を支配していく愉悦感身体中に広がり、触手に拘束された腕や、地面から浮いた脚の震えが止まらない。

「ひゃあああッ、ああッ、か、嘸まないで……ンッ、んああああ……ッ！」

感觸を確かめるように、アンは生意氣な突起に齒を突き立てる。

今までに感じたこともないような乳悅に、身体を弓なりに反らして、甲高い声で喘いでしまう。その瞬間を妹鴉は見逃さない。

彼女にトドメを刺すために、更に追い討ちをかける。

コリコリと乳首を甘噛みしながら、爪で苛めていたぷつくりと腫れ上がったもう片方の乳頭をギュッと摘んで、引つ張り上げた。

「はんっ、ひゃあ、あひいひいひいひいひい——ッ！」

壊れた人形のように咲の身体が、ビクンッ、ビクンッと大きく痙攣し、その後、ガックリと動かなくなる。

力なく垂れ下がった眉に、溜まった涙で潤んだ瞳。紅潮した頬に、口の端からだらしなく垂れた唾液。緩みきった表情を浮かべながら、込み上げてくる快感の波が頭の中を真っ白に染め上げていく。身体中から力が抜け、心地良い浮遊感に何も考えられない。

「あははっ、ちよつと苛めすぎちゃったかなァ？ 乳首もこんなに腫れちゃった」

ちゅぱつ！ と音を立てて、赤く腫れ上がった乳首からアンが口を離す。散々舌と齒で嚙られた乳首は涎でテカテカと照り光り、怯えるように痙攣していた。

「どう？ おっぱい気持ちよかったですよ？ もっと気持ちよくして欲しかったら火凧ち



「ふふっ……ちゅっ、ここが感じるんですの……んちゅっ……」

「そ、そんなわけ……ひゃうっ、ふう……んっ！」

ヒクヒクと震える秘穴の入口を舌でなぞられれば、背筋がピンツと強張り、ガクガクと震えてしまう。声の上擦り、嘘をついているのが簡単にばれてしまうのであった。

だが、狡猾な姉鴉は、素直に彼女の弱点を責めるような真似はしない。

舌を蜜穴の奥へと埋めると、次の弱点を探り始めるように、膣襞一枚一枚を丹念に舐め上げていく。

「ではここはどうですか……それともこっち……？」

「はうんっ、んっ、変なところ……舐めない……で……ふああああアア……ッ！」

まるでカリンの身体の構造を熟知しているかのように、メイが舌を這わせた箇所は、全て変身少女にとってのウィークポイントだ。そんな弱点を責められればブーツの底をひつきりなしに引つ掻き、女の急所に走る快感に身悶えてしまう。

姉鴉が舌を出し入れするたびに、膣内が戦慄き、姉鴉のクンニ責めに、どんどん濃い本気汁を漏らす。

「あらあら、エッチなお汁がいっぱい漏れてきましたわ。それに、味も濃くなって……じゅるっ、ふふ、美味しいですよ」

「い、言うな……ア……ッ！」

恥ずかしい身体の変化を逐一報告されれば、トクンツと下腹部が疼いていく。

「あらあら、また溢れてきましたわ、これはどういうことでしょう」

「あははっ、火凧ちゃん。まさか今のメイお姉ちゃんの言葉で感じちゃったのかな」

「そ、そんなこと……あるわけ……」

すぐに否定すればいいものの、自分の身体に起こった変化に困惑した変身少女はつい言葉詰まらせてしまう。

「おや、凶星でしたか？ ほら、また蜜が漏れてきましたわよ」

「うわァ、火凧ちゃんの変態さ〜ん」

「ちがつ……ひゃっ、はんっ！」

大事なところを舐めしゃぶられ、自分も知らなかった自身の身体の弱点を見つけられていく姉鴉のクンニ責め。そして、そんな弱点を罵られ感じてしまっていることを詰られる鴉姉妹の言葉責めが、変身少女のマゾヒスティックの快感を昂らせる。

身体を駆け巡る危険な快感。それを拒もうと首を横に振るも、クンニ責めに晒されている秘唇は濃厚な快楽液を溢れさせてしまう。

「さて、これだけ濡れれば十分でしょ。いつまでも遊んでいるわけにもいきませんし、そろそろ……」

「だよねェ。さあ、本日のメインイベントの始まり、始まりィ」

指と舌で弄られ、びしょびしょに濡れた肉穴から舌を引き抜くと、ついでにと皮から半分顔を出すクリトリスをペロリと舐め上げた。

「ひゃっ、はぁ……ふうふうウウンッ！」

ピュッ、ピュッ！

最後の最後で、彼女を襲った激感に、驚き収縮した肉門から、愛液が飛沫となつて噴き出る。

そのままぐつたりと倒れ込んでしまった変身少女に、手に持っていた卵を近づける。そして、先の細い先端部分を散々嬲られ、ピクピクと怯えたように震える淫裂に押し当てた。「はうっ、うう……んあっ、ああ……」

そのままメイが指に力を加えると、絶頂液を潤滑油に、卵は肉穴の中へとゆっくりと沈んでいった。

「ひっ、や、やめ……っ、んっ、んあああああアアッ！」

滅多に触れたことのない女性にとつてもっとも大事な場所。そんな神聖な秘穴を散々嬲られ、抵抗もできないままに、変身少女の濡れた淫裂を異物が押し広げていく。

メキ、メキメキッ！

今まで物を入れるなんてことも思いつかなかつた場所を、漆黒の異物に押し広げられる。狭い肉門を拡張させる恐怖に変身少女は悲鳴を口にしながら、潰れた蛙のように息を漏ら

す。

だが、感じたのは恐怖だけではない。卵が奥に進むたびに、ザラザラな殻の表面が粘膜を擦る。すると、甘い痺れが腰に広がり、ぷしゅつと奥に溜まった恥液が入口から溢れた。

卵の姿が完全に秘穴に埋もれ、ある程度進むと、まるで何かに引つかかるように動きを止めた。すると、メイはニヤリと笑い、涙を流すカリンの顔を覗き込む。

「ふふ、これからお母さんになるんですから、しつかりと大人の女性にならないといけませんね」

「えっ？ あっ……、イツ、ひぎいいいいいいイツッ！」
ピリッ！

まるで何かが破けたような感触が伝わり、次の瞬間身を引き裂かれるかのような激痛がカリンを襲う。

慌てて下半身に視線を移せば、卵を飲み込んだ秘穴からは愛液と共に赤い液体が流れていた。

——そ、そんな、嘘ッ、こんなの嘘よ……。

目に飛び込んでいた光景に、頭の中が一気にクリアになる。

本来ならば大事な人に捧げなければならぬ処女を化け物の卵に破られたショックに、

カリンの目から大粒の涙が零れた。

しかし、処女喪失の悲しみに暮れる暇など、敗北の女戦士には与えられない。

「ふあああ……ッ、あつ、んあ……あ……ッ！」

破瓜の激痛さえも、震えるお腹に刺さった羽根注射が快感へと変えてしまう。強烈な痛み
みに涙を流していた瞳が蕩け、快感に変化した痛みによって子宮が戦慄いた。

——な、なんで……こんな……、お腹熱くて……変になっちゃう……。

自身の身体の変化に戸惑う変身少女。そんな彼女に追い討ちをかけるように、姉鴉から
もう一つの卵を手渡された妹鴉が、マゾヒスティックな快感で戦慄く膣内に卵を埋めてい
く。

先ほどよりも数倍敏感な粘膜壁を擦られ、カリンは身体を強張らせ、雪崩れ込んでくる
快感に身体を痙攣させた。

強烈な快感は頭の中にピンク色の靄をかけ、まともな思考を彼女から奪っていく。

今まで味わったこともない快感に翻弄させる変身少女。そんな彼女はまだ知らない。こ
れから訪れる悲劇を——。

先に挿入された卵に、後から挿入された卵が近づいた時、それは起こった。

まるで何か新しい玩具を手に入れた子供のように、表情を明るくする妹鴉。そして、異
物挿入の快感に悶える変身少女に向かって絶望を招く真実を告げる。

「なにこれエ、処女膜治ってるウ」

「あつ、えつ、え……?」

一瞬言葉の意味がカリン自身も理解できなかった。だが、卵に引つかかる膜の存在感に、現実を直視する。

それはいかなる傷も癒やす不死鳥の力が、一度失った処女膜を復活させたのであった。

「あははつ、火凜ちゃんはラッキーだねエ。普通なら一回しか体験できないことを何度も体験できるんだからア」

「ちよつ、ちよつと待って……んぐう、あぐううう……あがつ、あぎいいいいいいイイイイ——ッ!!」

カリンの静止の言葉も聞かずに、アンは指に力を込める。すると、再び身を引き裂くような痛みが変身少女を襲った。だが、その痛みすらもすぐにあさましい身体は快感へと変えてしまう。

全身を一気に貫く被虐的な快感に、涙を流しながら悶え苦しむ変身少女。二度目の処女喪失の快感に戦慄く肉門からは白く濁った本気汁が溢れ流れる。

よがり泣く少女を嘲り、鴉姉妹は更に残酷な責めを開始しようとしていた。

「しかし、困りましたね。卵は子宮に寄生しなければ意味がないのですが、指では奥に届きませんわ」

わざとらしく困ったような表情を浮かべる姉。そんな姉に、妹が助言する。

「メイお姉ちゃん、ちょうどいい物が落ちてたよ〜」

妹鴉の手には、先ほどカリンが捨てさせられた愛剣のヘルメスが握られていた。

その剣を妹から受け取った姉鴉は、柄の部分を一ピクピクと怯えたように震えるカリンの秘門へと押し当てる。

「う、嘘よね……、や、やめつ、やめてえええエエツ！ あがつ、ああ……ぐうううツ、ひゃああああアアア——ッ！」

自らの武器が狭い肉穴を押し広げる感触に、カリンは苦しみ悶え泣く。

ヘルメスの柄は、奥に埋もれた卵まで行きつくと、二つの卵を押し進みながら、更に奥を指す。

狭い肉穴を卵が押し広げ、固い剣の柄が肉襞を抉る。あまりにも痛々しい責め。しかも、激痛は快楽に変換され、更に変身少女を追い詰める。

身体を乱暴に駆け巡る快感の荒波に、散々追い詰められた正義のヒロインは完全に戦意を喪失してしまっていた。

「あぐう……うう……んんんッ！」

狭い腔穴の最奥、子宮口まで辿りついた卵の先端が、閉じた入口に押し当てられる。真下から響き渡る刺激に、カリンは赤いポニーテールを振り乱しながら、イヤイヤと■の



「いザーメンだよー」

「ふぐつ、くう……、ウウ——ッ！」

口内に流れ込む精液を拒もうとするカリン。しかし、開口器によって閉じられない口の中へ、やむことなくチューブから精液が流れ続ける。

「んっ、んんっ、んぐっ、ぐうウウウ……ッ！」

次々と流れ込んでくる精液を必死になつて拒むカリン。しかし、無慈悲な機械は小さな口内が一杯になることなどお構いなく、次々にチューブを通し、変身少女の口内に生暖かいザーメンを送り込む。

「あぐう……ンッ！ んあつ、ああ……ンンッ！」

口内いっぱい広がっていく生臭い味。舌に絡み付き嫌な感触。口から鼻に抜ける青臭い精臭。気持ち悪くつて嫌悪感しか湧いてこないはずなのに、凶鳥の卵を宿した子宮が熱く疼いて止まらない。

「お口いっぱいザーメン溜めちゃって、味わっちゃってるのォ？ ほらほら、早く飲み込まないと、ずっとそのままだよー。あつ、ザーメン大好きな変態の火凛ちゃんはそのままの方がいいのかなァ？」

溜まっていく精液に、頬を膨らませる情けない変身少女の姿に、腹を抱えながら笑い出すアン。

そんな彼女の思い通りになるのは悔しかったが、小さな口いっぱいになっても、止まることなく流れ込んでくる白濁液は取り付けられたチューブが邪魔で吐き出すこともできず、変身少女は仕方なく口いっぱい溜まった精液を嚙下していく。

「はぐつ、ウウ……ッ、ふウウンッ！」

生臭く喉に絡み付く白濁液はひどく飲み辛い。鼻にも臭い精液が逆流し、ヒクヒクと震える鼻穴から白濁液が垂れ、変身少女の顔を情けないものへと変えていく。

——き、気持ち悪い……ッ！

勢いこそ治まったものの、口内に流れ込んでくる精液を嚙下し続けなければいけないカリン。口いっぱい広がる臭いも味も変身少女を不快にさせていく——はずだった。

——身体……また熱くなって……きちゃってる……。

粘ついたザーメンが食道を通り、胃に落ちると、先ほど口に精液を溜めていた時とは比較にならないほど、身体が火照り始めた。

まるで熱いお風呂に長時間浸かったかのように、全身がポカポカと火照り、頭が痺れて、変身少女がまともな思考力を奪っていく。

きつく相手を睨んでいたはずの瞳は潤んで、正義のヒロインとは思えないほど、表情が蕩けてしまう。

——お腹の奥……、卵疼いて……るっ……うう……ッ！

精液が喉を通るたびに、下腹部で凶鳥の卵が脈動した。卵にもっとも敏感な箇所を刺激され、変身少女の身体がピクピクと小刻みに震える。

「卵は子種を餌に成長し、貴女の身体を産卵に適した淫らなものへと作り変えていきます。ほら、身体の変化を感じるでしょ？」

喉を鳴らして、美味しそうに白濁液を飲む変身少女の様子を眺めながら、楽しそうに姉鴉が言う。

彼女の言葉通り、カリンの身体は本人も気付くほど、変化が始まっていた。

——あうっ、ううんッ！ お、おっぱいが……あうんッ！

お腕状のカップを宛てがわれた乳房に感じる違和感。内側からの圧迫感に胸が張り、尖り勃った先端がむず痒くなっていく。

——おっぱい……、どんどん熱くなつて……ふぁ……あぁ……ッ！

カップの振動に忙しなく刺激され続け、ジンジンと疼く胸は内側から異常な熱の上昇を見せていた。何かがドクドクと脈打ち、出口を求め暴れている。

「ふぐう……んッ！ んあっ、ひゃアア……ッ！」

胸の奥で感じる何かが迫り上がってくる感覚に、身体が強張る。しかし、そんな身体の緊張を解すように、カップの甘い振動が張った胸を解していくのであった。

——ひゃうんッ！ やっ、イヤッ！ 何か……何かくる……、きちやう……んんッ！

お椀状のカップの振動に、気を張った胸から力が抜けていく。心地良い快感に、従順にカップを崩し、甘く蕩けてしまう。

そんな胸を透明なカップが強く吸い付けば、沸き立つ熱の塊が一気に出口を目指し、吸い出される。

プシャッ、プシャアアアアアアアアアアアッ！

「はひひひひひイイイッ！ あふっ、ンっ……ああ……ッ！」

変身衣装の内側で、固くしこり勃つ胸の先端。可愛らしい桃色の乳頭から透明なカップの中に溢れ出る乳白色の液体。

我慢していた小便を排泄した時の快感を数倍高めたような解放感に、変身少女の身体がビクンッ！ と大きく跳ねた。

——な、なんで……私……母乳でちゃってる……？

お椀状のカップが吸引を強めるたびに、インナースーツを浸透し、胸の先端から溢れる乳白色の液体。それは、まさしく母乳だった。

絶対に出ることのない液体を溢れさせる自分の胸から、目が離せず呆然とするカリン。そんな変身少女を現実に引き戻すように、乳頭から熱いミルクがドピユッ、ドピユッと吸い出されていく。

——ひゃうっ、ンあッ！ お、おっぱい……吸わない……でえ……ンんんんッ！

胸の先端を熱いミルクが潜る^{くぐ}るたびに、強烈な快感が身体中を乱暴に駆け巡り、彼女を絶頂へと追い詰めていく。

剥き出しになった股間から大量の快楽液を噴き出し、搾乳アクメに身悶える変身少女。母乳を吸い出されるたびに感じる快感に、頭はぐちゃぐちゃに蕩け、まともな思考がおいつかない。

「ふううんんッッ！　んんッ、うううんんんんんんんッッ!!」

吸引カップに吸い出されていく大量の母乳。起立した乳首を潜り抜ける熱い液体が齎^{もたら}す快感。それが覚めないうちに次の母乳を無理矢理吸い出される。

変身少女が搾乳の快感を覚えるよりも早く、新たな母乳を吸い出されて、彼女を止め処なく快楽の波が襲う。

乳白色の液体を噴出しながら、いつまでも続く搾乳アクメにチューブを啞えさせられた口で、はしたなく喘ぎ悶える変身少女。

「ふふっ、言ったでしょ、卵が貴女の身体を作り変えると……」

「だよねえ、でも、まだまだこれからだよ。火凛ちゃんにはもつと淫らではしたない姿になってもらわなくっちゃ！」

だらしなく喘ぎ続ける正義のヒロインを嘲笑いながら、鴉姉妹たちは容赦なく次の責めを開始する。

ヴィ——ンッ！

搾乳責めに身悶える変身少女の耳に、突如聞こえた不気味なモーター音。

——こ、今度は、なに……？

音の正体を探ろうにも、身動き一つできない体勢の上に、チューブと繋がった開口器のせいで頭を動かすことすらろくにできない。

正体もわからないまま、徐々に近づいてくる不気味なモーター音。それはカリンの股間の辺りから聞こえてきた。

「うわっ、メイお姉ちゃん、エグウツ！ あれじゃあ火凛ちゃん死んじやうかもよ〜」

「そういうアンこそ、アレは少々大きすぎはしませんか？ アレでは裂けてしまいますわ」
火凛の視界に入らない位置を指さし、笑う姉妹。恐怖心を更に煽るような単語が次々と飛び交い、搾乳責めに悶えながらも、近づいてくる不気味な音に身構えるカリン。しかし、次の瞬間、自分の考えが甘かったことを思い知る。

「んんっ、ひい……ッ、ふぐううううウウウツ！」

搾乳責めと子宮内で疼く卵のせいで、先ほどから痛いまでに勃起した肉芽に走った衝撃。強烈すぎる刺激に屈んだ体勢で拘束された脚がガクガクと震える。

「女性なら、身嗜みには注意しなければいけません。そのブラシは真鳥羽さんのために特注したもので、それで綺麗に磨いてさしあげますわ」

剥き出しのクリトリスを襲った刺激の正体を姉鴉が告げる。それは、無数の毛が生えそろった丸いブラシだ。

ブウウウウッ！

ブラシは左右に回転しながら、鋭い毛先を敏感な突起へと押し当ててくる。

「んぐっ、ンンンッ！ んあ……っ、あっ、あぎいいいいイイツ！」

感覚神経の塊を鋭い毛先が搔き乱す。脳天にまで一気に駆け抜ける強烈な搔痒感から逃れようと、爪先立ちで必死に腰を浮かせる変身少女。

「火凛ちゃん、逃げちゃだめだよォ」

しかし、そんなカリンの逃げ場を塞ぐように、新たな責め具が突き出された可愛らしいお尻、ピクピクと震えるアヌスへと迫る。

——ひゃうんっ！ こ、今度はお尻……ッ!! あぐう……は、入ってこない……でえ……ッ！

変身少女の背後には、大小様々な球体が連なったアナルパールが設置され、彼女の逃げ道を塞いでいた。

咄嗟に腰を引いたことよって、一番前の珠がヒクつく排泄孔に触れた。アナルパールの無機質の冷たさに驚き、引いた腰を慌てて戻す。

「ふぐううんッ、ンンンッ……、んぐっ、ひゅううんっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元 **トリムマガジン**
SPECIAL SUPPLEMENT 特別付録

吸飲型触手

角手づくし

隔月発売

vol.80 02 2015

電子書籍も配信中!

二次元 **トリムマガジン** 2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

2015 FEBRUARY price 780yen

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

隔月発売

コミック UNREAL

大人気PCゲームのコミック多数連載!

HEROINE PINCH DX vol.3

隔月発売

電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

コミック **UNREAL**

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム 検索

書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。